

来間島のスギヤとンドウイギーの復元模型製作の記録

與那覇 史香、砂川 奈美子

はじめに

2021 年 (令和 3) 年 10 月、宮古島市において「国際サシバサミット 2021 宮古島*₁」が開催される。サシバとは、タカ科の鳥で、日本には春に青森県以南に渡来し、低山や丘陵地帯で繁殖する。秋になると越冬のため、繁殖地から南西諸島を経由して東南アジアやニューギニアに渡る。宮古諸島には、秋の渡りの時に大群で立ち寄るが、年々、その数が減少している。

同サミットでは、サシバの繁殖地、中継地、越冬地が集いサシバの未来について考える場として 2019 年より開催されており、宮古島での開催にあわせ、当館においてもサシバに関する企画展「サシバ展 (仮称)」の開催を予定しており、現在、その調査研究を進めている。

また、同サミットの事業として、今年度 2 種類 (昼用、夜用) のサシバの捕獲用小屋の復元模型が製作された。製作者は、来間島出身の国仲富美男氏 (1951 年生) で、自身の少年時代の記憶をもとにこれらの復元模型の製作にあたった。来間島では、この捕獲用小屋の昼用をスギヤ (sīgia)、夜用をンドウイギー (nduigi) と呼んでいた。また、サシバのことを来間島の方言でタカ (taka) と呼ぶ。

当館では、スギヤおよびンドウイギーの製作工程の記録と、来間島におけるサシバとの関わりについて製作者の国仲氏に聞き取り調査 (2020/8/27、10/2、10/8、10/9) を行った。本稿では、その製作工程の記録と聞き取り調査の報告をする。また、聞き取りの中で登場した植物や地名、サシバに関連する事項について来間島の方言で記録する。方言の表記は、カタカ

ナと国際音声記号 (簡略) を用いた。なお、カタカナで書き表せない音には、一応カタカナで表記した上、下線をつけて他の音と区別した。

今回製作したスギヤおよびンドウイギーは、現在、当館に保管されており、同サミットやサシバ展にて展示されたのち、当館にて常設展示される予定となっている。

1 宮古の人々とサシバとの関わり

宮古の人々とサシバとの関わりについては、当館紀要第 23 号に久貝勝盛氏が「宮古のサシバ文化」(久貝 2019) として詳しく紹介している。本章では、久貝氏の「宮古のサシバ文化」を参考に宮古の人々とサシバとの関わりについて概要をまとめる。

かつて宮古では、サシバの渡りの時期 (寒露*₂) になると、サシバの捕獲用小屋であるツギヤ*₃ (来間島では「スギヤ」) が造られ、サシバが捕獲されていた。サシバは貴重な換金動物であり、貴重なタンパク源として宮古の人達に重宝されていた。また、子どもたちの遊び相手としても親しまれていた。

1972 (昭和 47) 年、沖縄の日本復帰により、日本本土の鳥獣保護法が適用され、サシバも保護鳥に指定され捕獲が禁止となった。しかし、昔からサシバが地域住民の生活の一部になっていたという背景もあり、サシバ保護の思想を浸透させることは至難の業だったが、行政や宮古野鳥の会が中心となって保護活動を行い、現在ではサシバの密猟もなくなり、ツギヤが造られることもなくなった。

2 来間島でのサシバの捕獲方法

国仲富美男氏によれば、来間島でのサシバの捕獲方法は木に小屋を造って捕獲する方法と、竹竿を用いて木にとまるサシバを捕獲する方法（イジャイ (idgai)）*₄があったという。さらに捕獲用の小屋もスギヤとンドウイギーの2種類ある。それぞれの特徴を下記にまとめる。

1) スギヤについて

スギヤとは、木に造られるサシバ捕獲用の小屋のことで、昼間に利用される（図1）。

(1) スギヤの設置場所

スギヤは、来間島の北東（民俗方位*₅では北西）の崖下（写真1）に自生するクロヨナ〔方言名：ウカバギー (ukabagi)〕の木に主に造られた。来間島北東の崖面は、バダカジ (badakadzi)〔意味：バダ；岩の割れ目、カジ；風〕と呼ばれる海から崖面の割れ目に吹き抜ける風が吹き、その風によってサシバが舞い降りることから、捕獲するのに最も良い場所とされている。また、サシバがよく留まる木は入札にかけられ、5ドル以上で落札されていた。落札者はだいたい同じ人物（サシバ捕りの名人）であり、その木はプカーティギー (puka:tigi)〔意味：プカティ；屋号、ギー；木〕と、その人物の屋号がつけられた。

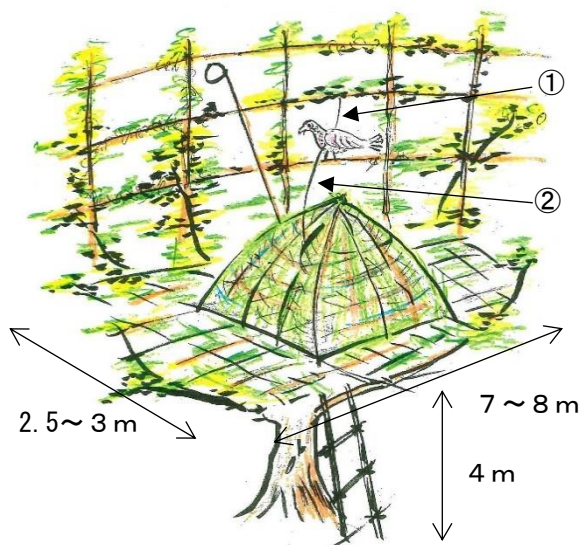


図1 来間島のスギヤ（絵：国仲富美男氏）



写真1 スギヤの設置場（○で囲った部分）
（空中写真：国土地理院提供）

(2) スギヤの構造

スギヤが造られる木は、5~6 mほどの高さがあった。大型のスギヤだと、床面の幅が7~8 mほど、奥行きが2.5~3 mほどもあった。地上から4 mほどの高さに床を水平に組み、床の中央に小屋を造る。小屋の大きさは約2畳、成人男性1~2人が身を隠せるほどである。床の材料には、リュウキュウガキ〔方言名：フボーギー (ffubo:gi)〕やテリハボク〔方言名：ヤラヴギー (jaravgi)〕の幼木などを、小屋の材料にはテリハノブドウ〔方言名：ウプムスカーパイ (upumusi-ka:paï)〕やゲッキツ〔方言名：スマトウイギー (simatuigi)〕などが使用された。

海側の面に、サシバが留まるとまり木を格子状に組む。とまり木には、テリハノブドウやモクマオウ〔方言名：モクモー (mokumo)〕が使用された。

とまり木や小屋には、擬装の枝葉をさして自然に溶け込ませた。このカムフラージュ用の枝葉のことをオーマスキー (o:masiki) と言い、ゲッキツが主に使用された。オーマスキーには、緑色が長く残る葉が使われた。

木材をくくるために使用される縄は、アダンの気根〔方言名：アダナス (adanasi)〕やススキ〔方

言名：ヌー (nu:)、縄の材料としてのススキは「ツカニ (tsikani)」と呼ぶ] でなった縄を使った。アダナスの縄は、船のロープにも使われるほど丈夫で貴重だったため、床と土台の木とをくくる際に用いられた。

(3) 捕獲方法

とまり木にはおとり用のサシバが置かれ、逃げないように背と腹に2本の縄で繋げる(図1①、②)。おとり用のサシバのことを、ブーズダカ (bu:dzidaka) [意味: ブーズ; 誘う、ダカ(タカ); サシバ] という。縄をサシバにくくる際、縄が食い込まないように布を腹部にまいてから縄をくくる(写真2)。背の縄はとまり木に繋げ、腹の縄は中央の小屋まで伸びており、縄を引いてサシバをばたつかせることで、離れた所にいるサシバをとまり木におびき寄せせる。そして、サシバがとまり木に留まったら、竹竿の先にクロツグ [方言名: マーニ (ma:ni)] の若葉の芯でなった



写真2 サシバ(剥製)の腹部に布をまき、縄をくくる



写真3 竹竿にくくられたバナ

縄を輪っか状にした罫を小屋からのぼして、サシバの首にかけて捕まえる。この罫をバナ (bana) と呼ぶ(写真3)。バナの構造の詳細は、後述の「第2章 第3項(1)バナの構造」にて紹介する。竹竿は長さが4.5~5mほどあるため、床面はあえて隙間をつくり、竹竿が床下に抜けるよう工夫がなされている。竹竿の材料となる竹は宮古にはない種類だったため、その時期になると沖縄本島から取り寄せていた。

おとりに使うサシバは、アカミー (akami:) [意味: アカ; 赤、ミー; 目] と呼ばれる赤みがかった黄色の目の大人のサシバが良いといわれ、寒露の初期にイジャイで捕まえ、高い値段で売買されていた。

2) ンドウイギーについて

ンドウイギー [意味: ンドウイ; 手で捕まえる、ギー; 木] は、木に造られるサシバ捕獲用のやぐらで、夜間に利用された(図2)。スギヤは男性が利用するのに対し、ンドウイギーは主に女性が利用していた。

(1) 設置場所

ンドウイギーは、主に来間島の中央や南西の浜に自生するモクマオウやテリハボク、ガジュマル [方言名: ガズマギー (gadzimagi:)] に造られた。

(2) ンドウイギーの構造

ンドウイギーは、5~6mほどのモクマオウやテリハボク、ガジュマルの木に造られた。スギヤとは形が異なり、やぐら状に木を組んで造る。床面は、縦横ともに1.5mほど、床面から頂上までの高さも1.5mほどで、人ひとりがちょうど隠れるくらいであった。スギヤ同様、オオーマスキーをさしかムフラージュする。オオーマスキーには、ゲッキツやソテツ [方言名: シュティツ (jutitsi)] が使用された。

頂上は、海側の面が高くなるように造られて

おり(別紙2 5)、一番高い辺にサシバが留まる。

(3) 捕獲方法

日が暮れ、寝床を探してンドウイギーに舞い降りるサシバを狙う。ンドウイギーに登り、やぐらの中に身を隠し、サシバがンドウイギーの頂上に留まる瞬間を狙って、羽を広げた状態のサシバを両手で押さえつけて捕獲する。サシバが羽をたたんでしまうと、すぐに飛び立ってしまうため、留まった直後を狙わなければならない。

ンドウイギーは、女性が使用した。腰の曲がったオーバーもサシバの渡りの時期になると、ンドウイギーに登ってサシバを捕獲していた。

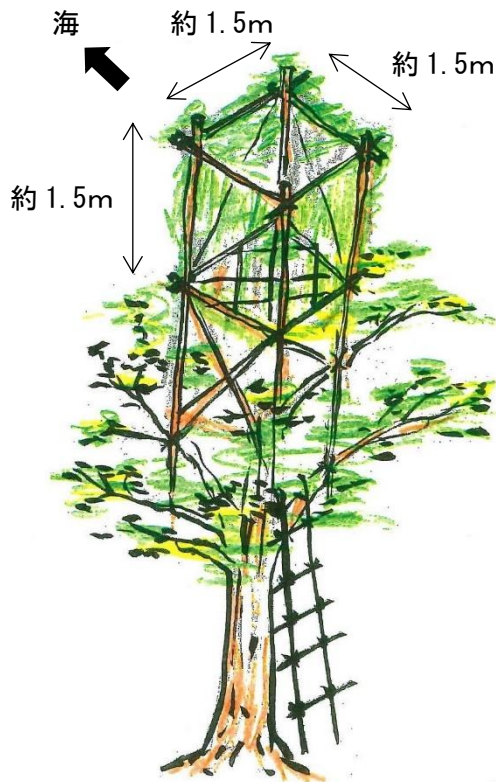


図2 来間島のンドウイギー(絵: 国仲富美男氏)

3) イジャイについて

イジャイとは、夜歩き回って木に留まって眠っているサシバを、スギヤでも使用する竹竿にくくられたバナを用いて捕獲する方法である。また、サシバをバナで捕獲する行為自体は、タ

カフツツ (takafftsi) [意味: タカ; サシバ、フツツ; 捕まえる] という。

(1) バナの構造

バナは、クロツグの若葉(写真4)の芯を3本用いて縄をなつてつくられる。はじめに2本でなつて縄にした後、残りの1本を追加してなう。普段使用する縄は右縄でなうが、バナに使用する縄は左縄でなう。左縄は、祭祀行事などで使用されるが、なぜバナも左縄を使うかは分からない。バナは、引くと締まるように結ばれている(写真5)。



写真4 クロツグの若葉



写真5 バナ

(2) 捕獲方法

眠っているサシバの場合、首をすくめるような形で眠るので、竿の先でチョンチョンとつき、首が出てくるのを見計らって、首にバナをかけて捕獲する。夜に捕獲するので、懐中電灯が必要となる。木にとまっているサシバを見つけたら、懐中電灯でサシバを照らした姿勢のま

ま竿をあげて捕まえる。もし明かりを動かしてしまえば、その瞬間に逃げてしまう。

稀に懐中電灯の明かりで目がくらみ、落ちてくるサンバもいた。

3 復元模型の製作工程

本章では、国仲富美男氏が製作したスギヤおよびンドウイギーの復元模型の大きさや材料、製作工程を紹介する。

これらの復元模型は、10月8日(木)、9日(金)の2日間で製作された。また、材料等は9月上旬ごろから国仲氏が調達していた。

なお、復元模型はのスケールは、スギヤが実物の約4分の1のサイズ、ンドウイギーのが約5分の1のサイズである。そのため、材料となる植物も復元模型の大きさに合わせた大きさにする必要があるため、本来の材料とは異なる植物を使用した。

1) スギヤの復元模型 (写真6)

(1) 大きさ (実物の約4分の1のスケール)

- ①台から止まり木までの高さ：1.76m
- ②止まり木の幅：1.76m
- ③台から床面までの高さ：0.9m
- ④床面の長さ：1.6m
- ⑤床面の奥行き：0.82m

(2) 材料

- ①土台となる木：ガジュマル
- ②床・とまり木：モクマオウ
- ③小屋：ススキ、クロツグ



写真6 スギヤ模型

- ④オーマスキー：ゲッキツ
- ⑤はしご：モクマオウ
- ⑥縄：アダンの気根、ススキ
- ⑦バナ：クロツグ

(3) 製作工程

- ①土台となる木(ガジュマル)を選び伐採する。
 - ②伐採したガジュマルを台に固定する。
 - ③ガジュマルの枝にモクマオウの枝を水平に並べ、アダナスの縄でくくりつけて床をつくる。
 - ④モクマオウの枝で、格子状の止まり木をつくる。
 - ⑤床の中央にススキで小屋の骨組みをつくり、クロツグやゲッキツの葉で覆う。
 - ⑥小屋や止まり木をゲッキツの枝葉でカムフラージュして完成。
- ※製作工程の写真は、別紙1「スギヤの製作工程写真」にまとめる。

2) ンドウイギーの復元模型 (写真7)

(1) 大きさ (実物の約5分の1のスケール)

- ①台から頂上までの高さ：1.67m
- ②床面の幅と奥行き：各0.2m
- ③床面から頂上までの高さ：0.32m
- ④台から床面までの高さ：1.35m

(2) 材料

- ①土台となる木：リュウキュウコクタン [方言名：フキタ (ffukita)]



写真7 ンドウイギーの写真

- ②やぐら・床：モクマオウ
- ③オーマスキー：ゲッキツ
- ④はしご：モクマオウ
- ⑤縄：アダンの気根、ススキ

(3) 製作工程

- ①土台となる木(リュウキュウコクタン)を選び伐採する。
 - ②伐採したリュウキュウコクタンを台に固定する。
 - ③リュウキュウコクタンの枝にモクマオウの枝を4本立て、ヤグラ状に組む。
 - ④床面を設置する。
 - ⑤頂上は海側の面が高くなるよう斜めにする。
 - ⑥ゲッキツの枝葉でカムフラージュして完成。
- ※製作工程の写真は、別紙2「ンドウイギーの製作工程写真」にまとめる。

4 材料となった植物について

本章では、来間島のスギヤやンドウイギーに使用された植物や今回製作した復元模型に使用した植物をまとめて紹介する。なお、方言名は来間島での呼び方とする。植物の写真は、別紙3「植物写真」にまとめる。

クロヨナ (写真8)

方言名：ウカバギー (ukabagi:)

リュウキュウガキ (写真9)

方言名：フフボーギー (ffubo:gi:)

テリハボク (写真10)

方言名：ヤラヴギー (jaravgi:)

テリハノブドウ (写真11)

方言名：ウプムスカーパイ (upumusī-ka:pai)

ゲッキツ (写真12)

方言名：スマトウイギー (sīmatuīgi:)

モクマオウ (写真13)

方言名：モクモー (mokumo:)

アダンの気根 (写真14)

方言名：アダナス (adanasi)

ススキ (写真15)

方言名：ヌー (nu:)、ツカニ (tsikani)

クロツグ (写真16)

方言名：マーニ (ma:ni)

ガジユマル (写真17)

方言名：ガズマギー (gadzīmagi:)

ソテツ (写真18)

方言名：スウティツ (sutitsī)

リュウキュウコクタン (写真19)

方言名：フフキタ (ffukita)

5 その他の聞き取り

1) 捕獲されたサシバについて

捕獲されたサシバは、平良まで船で運び市場や個人に売買された。来間島⇄平良(現ホテルアートルエメラルド宮古島近く)の船が1日1便あり、その船でサシバを運ぶ。運ぶ際は、サシバのお腹を上にして甲板に並べられていた。

サシバは商品なので、家で消費する事はあまりないが、食べる際は味噌味の雑炊にして食べる。その雑炊をタカジュージ (takadžu:ji) [意味：タカ；サシバ、ジュージ；雑炊] と呼ぶ。当時食べていたお米は、バリマイ (barimai) と呼ばれる形の崩れた欠けたお米で、青い麻袋に入っていた。

2) 子どもとサシバについて

サシバは子どもの遊び相手にもなっていた。飛来初期は、捕獲するサシバの数も少ないため、子どもにサシバは与えられなかった。子どもに与える際は、怪我をしないように爪と嘴を切っていた。

この時期はサシバも連れて登校しており、サシバのことが気になって先生の話もあまり聞かなかった。運動会の時期とサシバの飛来時期が重なっていて、練習中もサシバが気になって先生も生徒も集中できないほどだった。

飼っているサシバのエサは、自分たちで捕った。エサはスズメ〔方言名：スピジマサ (sipidjimasasa)] をあげた。夜寝ているスズメを手づかみで捕まえていた。

サシバが捕獲禁止になる前、琉球大学から調査目的でサシバ捕獲の依頼が学校にあった。捕まえたサシバは学校で回収しており、1匹25セントで買い取ってもらえた。

小遣いは真っ先に電池を買う。当時電池は高価なものだった。イジャイに使用する懐中電灯は新しい電池だと遠くまで光が届き、すぐにサシバが見つかるので大変重宝された。

3) バダと道の名前

スギヤを設置する来間島北東の崖面の割れ目から吹き込む風をバダカジと呼んでいる。また、崖面の割れ目は道として利用されており、ガジュマルの根をつかんで上り下りをしてきた。岩の割れ目を利用した道は最低でも6ヶ所ほどあり、現在、1か所は利用されている。

崖面の割れ目や道には、それぞれ名前があり、名前はその道を切り開いた人がつけ、屋号やその人にちなんだ名前がつけられた。

(1) 崖面の割れ目の名前

- ① タキナカバダ (takinakabada) [意味：タキナカ；屋号、バダ；端]
- ② バソーバダ (baso:bada) [意味：バソー；芭蕉、バダ；端]
- ③ ギスツバダ (gisitsibada) [意味：ギスツ；成長したススキで、茅葺き小屋の壁の材料となる、バダ；端]

(2) 道の名前

- ① ウプフテームツ (upufute:mtsī) [意味：ウプ；大きい、フテ；ひたい、ムツ；道]
- ② キジャムツ (kidja:mtsī) [意味：キジャ；「キジャ」という男性の名前、ムツ；道]
- ③ ムマーマムツ (mma:mamtsī) [意味：ムマ；

老婦人、アマ；小さくて可愛いものを表す「ガマ」が変化した語、ムツ；道]

4) 来間小学校の校歌

宮古島市立来間小学校*6の校歌の4番の歌詞に、サシバが「北の国」から飛来するという一節があるが、かつては「南の国」となっていた。その理由は、サシバが来間島に飛来する際、島の南の方角から飛来するため、サシバが南から飛来すると勘違いしていたのでないかと考えられている。のちに、サシバは北から飛来することが分かり、歌詞も「北」に書き換えられた。

「来間小学校校歌」 作詞・作曲 砂川英一

1. 黒潮おどる南の
太平洋上空高く
来間島根にそびえ立つ
これぞわれらの母校なり
2. ここにつどえる若人よ
尊き使命身につけて
共にいたわりはげみあい
いざやすすまん諸共に
3. 湧きてつきせぬ真清水の
流れるようにつぎつぎと
世に出てつくせはらからよ
いざや学ばん諸共に
4. 山にそてつの実ころ
北の国から渡りきて
大空かけるかたの如
真すみの空にはばたかん

おわりに

今回、来間島のスギヤおよびインドウイギーの作製方法の記録と、来間島におけるサシバとの関わりについて、方言もあわせて聞き取り調査を行った。宮古のサシバの捕獲方法は、世界でも類をみないと言われており、本記録が今後のサシバ研究の一助になれば幸いである。

次年度、当館ではサシバに関する企画展を開催予定であり、宮古島市の市鳥であるサシバについて様々な角度から紹介する。地元の方々によりサシバに親しみをもってもらえるような展示会を開催したい。

謝辞

スギヤおよびインドウイギー復元模型の製作の記録保存と聞き取り調査に際し、国仲富美男さんには長期にわたってご協力いただきました。大変お世話になりました。ここに記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、方言の発音表記などについて、宮古島市史編さん室の新垣則子氏、佐藤宣子氏にご教示いただきました。さらに、佐藤宣子氏には、植物写真をご提供いただきました。ここに記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

参考・引用文献

- 久貝勝盛 2018 「宮古のサシバ文化」『宮古島市総合博物館紀要 第 23 号』宮古島市総合博物館
- 仲地邦博・久貝勝盛・岡徹・砂川友弘・金子進・真壁靖人・西原武則 2014 「サシバの現状と保護」『宮古野鳥の会 40 周年記念誌』宮古野鳥の会
- 松井 健 1989 『琉球のニュー・エスのグラフィック』人文書院
- 宮古島市史編さん委員会 2018 『宮古島市史第二巻 祭祀編 (上) 重要地域調査 みやこの祭祀』宮古島市教育委員会
- 宮古島市史編さん委員会 2019 『宮古島市史第三巻 自然編 第 I 部 (本編) みやこの自然』宮古島市教育委員会
- 宮古島市史編さん委員会 2020 『宮古島市史第三巻 自然編 第 I 部みやこの自然 別冊』宮古島市教育委員会

注釈

*1 国際サシバサミット

絶滅危惧種であるサシバの繁殖地、中継地、越冬地が集い、サシバの未来について考える場として 2019 年より開催されているサミット。2019 年に栃木県市貝町で開催され、2020 年に沖縄県宮古島市、2021 年にフィリピンルソン島、2022 年に台湾で開催予定となっている。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、宮古島市での開催が 2021 年に延期となった。

*2 寒露

二十四節気のひとつで、旧暦の 10 月 8 日頃。

*3 ツギヤ

かつてサシバを捕獲するために木に造られていた小屋。宮古島や伊良部島ではツギヤ、来間島ではスギヤと呼ばれていた。

*4 イジャイ

来間島では、夜間、引き潮時にイノー（礁池）内でエビやタコなどの生物を捕獲する漁法もイジャイと呼び、特に夜間大潮となる冬場に盛んに行われる。他地域では、イザリ漁とも呼ばれる。夜、歩き回ってサシバを捕るイジャイは、海のイジャイと区別して「タカイジャイ」とも呼ぶ。

*5 民俗方位

その地域の住民が日常的に使用している方位であり、一般的な自然方位とは異なる。

*6 宮古島市立来間小学校

1895 (明治 28) 年下地尋常小学校の分教場として設置。来間島唯一の小学校であったが、2020 (令和 2) 年 3 月 31 日に廃校となった。

別紙1 スギヤの製作工程写真



1 土台となるガジュマルを伐採する。



2 伐採したガジュマルを台に固定する。



3 ガジュマルの枝にモクマオウの枝をくくりつけて床をつくる。



4 モクマオウの枝で格子状にとまり木をつくる。



5 床の中央にススキで小屋の骨組みをつくる。



6 小屋や止まり木をゲッキツやクロツグの枝葉でカムフラージュして完成。

別紙2 ンドウイギーの製作工程写真



1 土台となるリュウキュウコクタンを伐採する。



2 伐採したリュウキュウコクタンを台に固定する。



3 リュウキュウコクタンの枝にモクマオウの枝を4本立て、ヤグラ状に組む。



4 床面を設置する。



5 頂上は海側の面が高くなるよう斜めにする。



6 ゲッキツの枝葉でカムフラージュして完成。

別紙3-1 植物写真



写真8 クロヨナ
(撮影者：上；佐藤 宣子 氏、下；国仲 富美男 氏)

写真9 リュウキュウガキ
(撮影者：上；佐藤 宣子 氏、下；国仲 富美男 氏)



写真10-1 テリハボク

写真10-2 テリハボク
(撮影者：佐藤 宣子 氏)

別紙3-2 植物写真



写真11 テリハノブドウ
(撮影者：佐藤 宣子 氏)



写真12 ゲッキツ (撮影者：佐藤 宣子 氏)



写真13 モクマオウ



写真14 アダンの気根



写真15 ススキ



写真16 クロツグ (撮影者：佐藤 宣子 氏)

別紙3-3 植物写真



写真17 ガジュマル



写真18 ソテツ



写真19 リュウキュウコクタン

※撮影者の表記のない写真は、筆者が撮影した。

